

田世民著

『近世日本における儒礼受容の研究』

(ペリかん社・二〇一二年)

石黒 衛

本書は、著者が二〇〇八年に京都大学から授与された博士学位論文「近世日本における儒礼受容の研究——『文公家礼』をめぐる儒家知識人の思想実践を中心に」を核として二〇〇三年から二〇一〇年にかけて発表された諸論考をまとめられた論文集である。その書名からも理解されるように、儒教儀礼の規範書である朱子の『家礼』を近世日本の儒家知識人たちがいかに受容し、特にその葬祭礼をいかに自身の思想的課題として主体的に受けとめ実践してきたか、その様々な位相が明らかにされている。また全国の図書館や文庫に眠る未刊行史料群を丹念に調査され、従来の研究では余り活用されることのなかった写本や稿本、日記類をも分析対象として、近世日本に生きた儒家知識人たちの実態にも迫ろうとする労作である。

まず、本書の目次を掲げその紹介からはじめたい。本書の構成は以下の通りである。

- 序論 近世日本の儒礼実践研究——東アジアの視野から
- 一 新しい近世思想史研究への視座
- 二 本書の構成
- 第一章 熊沢蕃山の儒礼葬祭論と『葬祭辨論』
- 一 熊沢蕃山の水土論と儒礼観
- 二 熊沢蕃山の葬祭論
- 三 熊沢蕃山の著作か？『葬祭辨論』考
- 四 『葬祭辨論』の内容
- 第二章 崎門派の『文公家礼』に関する実践的言説
- 一 『家礼』喪祭礼に関する崎門派の実践的言説
- 二 崎門派の死生観と鬼神観
- 三 喪祭礼をめぐる儒者たちの思想的位置
- 第三章 浅見綱齋の『文公家礼』実践とその礼俗観
- 一 『喪祭小記』の著述から『家礼』の実践へ
- 二 綱齋の『家礼』実践と『家礼師説』
- 三 綱齋の礼俗観——礼と俗の調和と葛藤
- 四 『喪祭小記』の後世への影響
- 第四章 水戸藩の儒礼実践——『喪祭儀略』を中心に
- 一 『喪祭儀略』改訂前後の諸本
- 二 『喪祭儀略』内容の変遷とその意義
- 三 後期水戸学の儒礼に関する実践的言説
- 第五章 懷徳堂における儒教儀礼の受容——中井家の家礼実践を中心に

一 『喪祭私説』の成立過程

二 『喪祭私説附幽人先生服忌図』写本の内容とその意義

三 中井家の葬儀と『喪祭私説』

第六章 懷徳堂の儒礼祭祀と無鬼論

一 『喪祭私説』の祭祀と中井家の儒礼祭祀

二 並河寒泉日記『居諸録』にみる懷徳堂知識人の祭祀活動

三 無鬼論と鬼神祭祀論の間

四 無鬼こそ祭祀

結論 儒礼実践において思想を生きたる知識人たちの諸相

一 礼文——近世日本知識人は礼制の構築と儒礼実践に努めた

二 礼器——近世日本知識人は礼に従い俗に即して礼器を制作した

三 礼意——近世日本知識人は儒教の礼楽文明を追求した

補論一 江戸日本における儒礼実践の中の『論語』

一 崎門派朱子学者の喪祭礼実践と『論語』解釈

二 懷徳堂知識人における喪祭礼実践と『論語』解釈

補論二 中井竹山・履軒の礼学についての一考察

一 懷徳堂の礼学著作

二 竹山・履軒の礼説——「忌日」、「禪祭」をめぐる議論を例に

三 竹山・履軒の礼学思想と『喪祭私説』およびその儒礼

実践の関係

参考文献／初出一覧／あとがき

二

まず序論において、著者自らがよつてたつ方法的視座が提示される。著者はこれまでの日本近世儒学の研究を批判的に吟味し、従来の研究が、書かれたテキストの思想分析による、「思想構造の再構成的研究」「思想の社会的機能に関する研究」「儒学の受容史研究」に止まっているとする。その上で、「言説分析」に親近感を示しながらもそれとは立場を異にするという。すなわち「言説レベルを超えて知識人たちがいかなるレベルで思想を理解し、それを社会において実践したのか」にこだわること。また「家礼」受容についても近世知識人たちの社会生活に注目して葬祭礼実践の意味を問う研究はなかったとし、その受け止め方や実践の意味を明らかにしようとする。ただし、その際には「儒学の日本化」論や「一国思想史」に陥らないことが強調されている。こうした序論的方法論的視座のもと、第一章以下、具体的な分析がなされていく。

まず第一章では熊沢蕃山の儒礼葬祭論が論じられる。著者によれば蕃山はその水土論・人情論によつて、すべての人には『家礼』にもとづく儒葬を求めることはしない。その水土によつて礼はたてられるべきであり、その帰結としてあるのが彼

の火葬容認論である。ただし蕃山は儒葬を否定したわけではなく、身分や家産の有無に応じた儒葬の礼を主張したのである。また、蕃山の著作と目されている『葬祭辨論』と浅見綱斎の『家礼師説』の関係を論じて、『葬祭辨論』が『家礼』葬祭礼に基づいた議論的な解説書であり、火葬批判の書として広く読まれていたこと、そしてその著者を蕃山とすることに再考を促している。

第二・第三章では崎門派の『家礼』をめぐる「実践的言説」が論じられる。著者によれば「実践的言説」という用語には、「実践を踏まえた言説」と「実践を方向付ける言説」という二つの意味が内包されており、朱子学をいかに生きるか、その切実な葬祭礼の実践が崎門派による『家礼』受容のありかたとして論じられていく。第二章では浅見綱斎の『葬祭小記』や『家礼師説』、若林強斎の『家礼訓蒙疏』を中心に分析がなされ、崎門派は朱子学を単に言説的レベルで理解するのではなく、生活レベルで礼を実践すべく『家礼』に取り組んでいたこと、日本社会に定着していた仏式葬祭に対抗し、『家礼』にもとづくあるべき葬祭礼を提示しようとしたことが指摘される。また中村惕斎との比較を通じて明儒に対する姿勢等、『家礼』受容をめぐるそれぞれの儒者たちのスタンスの違いも明らかにされている。また第三章では、第二章をうけて綱斎の具体的実践のありようが論じられている。『家礼』をめぐるつなされる委細を、尽くした綱斎による叙述は、単なる『家礼』の注釈ではなく、

中国とその習俗を異にする日本においていかに『家礼』を実践するかを、実地的体験を踏まえてする実践であることが指摘され、礼をめぐる俗との葛藤の中を生きることに努力する綱斎の姿が浮き彫りにされる。

第四章では、水戸藩における葬祭礼の受容が論じられる。著者は全国の図書館等に所蔵されている、水戸光圀が藩士たちに頒布した『家礼』にもとづいて葬祭礼を解説した『喪祭儀略』の調査を通じて、従来指摘されることのなかった二系統の『喪祭儀略』の存在を明らかにする。そしてその変遷には実際に行われた葬儀の状況によって改められていった可能性がうかがわれること、また「題点」など、水戸藩における明文化の積極的受容のあったこと、またそこには朱舜水の役割が大きかったことが指摘されている。そしてこの水戸藩における儒葬祭の受容は後期水戸学にも影響していることも示唆される。

第五章・第六章では、懐徳堂における儒礼受容と鬼神祭祀が論じられる。第五章では中井梵庵の『葬祭私説』を軸に、特に中井家における儒礼実践に焦点が当てられる。梵庵の『葬祭私説』と竹山・履軒によるその校訂による成立過程が明らかにされ、履軒の『服忌図』が『葬祭私説』の喪期の欠如を補完するものであったことが指摘される。また「中井家歴代裏事録」を用いての詳細な分析により、試行錯誤しながら家礼を実行していった中井家の儒礼実践、そこには単なる排仏ではない世俗との折り合いをつけながらの懐徳堂知識人による儒礼実践の様相

が指摘されている。また第六章では前章をうけながら、特に並河寒泉の日記『居諸録』を通じて懷徳堂知識人たちの日常における祭祀実践が紹介され、また祖先祭祀の心情性を訴えた懷徳堂無鬼論は、世間の俗信的な人情と仏式祭祀に向かつてなされたものであったことが指摘され、市井の中で生きる懷徳堂知識人たちの姿が明らかにされている。

そして結論の章では、第六章までの分析を踏まえるかたちで、近世日本の知識人たちが人生の通過儀礼を真剣に捉え、『家礼』をモデルとして、それぞれが妥当とする葬祭儀礼を工夫し、社会生活において実践したとしてその諸相についてより広い視点から論じ直されていく。特に最後において言及されている神葬祭については重要な指摘であろう。

また、補論一では、崎門派と懷徳堂知識人の『論語』解釈から祭祀来格、無鬼論と儒礼実践の関係が論じられ、両者はその思想的立場や儒礼実践の姿勢は異なるものの、社会生活において儒教儀礼を積極的に実践しようとするその出発点においては一致していたことが指摘される。そして補論二では、竹山『礼談』履軒『礼記雕題略』蕉園『蕉園首書礼記集説』が紹介され、その分析を通じて彼らの礼学研究が彼らの儒礼実践に深く関わるものであったことが指摘される。

三

以上、非常に簡略ながら著者の主張を章ごとにまとめてみた

わけであるが、評者による読み間違いやより重要な論点の見落としがあるかも知れない。ただ『家礼』や儒礼に関する知識の少ない評者にとって、本書によって教えられることは多かった。例えば、水戸藩の『喪祭儀略』や懷徳堂の「中井家歴代襄事録」による実際の葬儀におけるありかたや寒泉の『居諸録』にみる儒者の日常生活における儒礼実践の様相等。また儒礼実践を見ていく場合には思想的テクストだけではなく、日記や葬儀記録等のテクストの分析が重要であることを指摘する著者の意見も十分に首肯できるものである。またそれらの史料を含めて未刊行の史料などを地道に発掘調査され、分析されたことにも敬意を表したい。さらにまた本書の成果は、従来個別の儒者を論じる中でしか取りあげられてこなかった『家礼』受容という問題を蕃山から懷徳堂知識人まで並べてみせることにより、『家礼』や葬祭実践をめぐる様々な位相が明らかにされたということであろう。また同時に明儒や明文化という視点を導入することにより、明文化導入に積極的であった水戸藩や懷徳堂、あるいは惕斎との共通性や明儒を認めない崎門派との差異等、様々な位相が見えてくる。また明儒や明文化という視点は、明清交代も含めて近世日本の中国認識・自己認識を改めて問い直すことができるようにも思われた。

ただ、評者には本書のキーワードでもある「実践的言説」という概念がどうしても曖昧なまま残ってしまった。言説分析が従来の分析方法、テクストの背後に思想主体を想定し、内在的

に己を読み込むことによって再構成しようとする方法論に対する批判であるとするならば、テクストの意味は同時代の無数のテクストとの関係から理解されなければならぬだろう。そうでなければ、著者が序論において厳しく戒めている「近代」を「江戸」に読み込んでしまうことになりはしないだろうか。例えば著者は、近世の知識人が儒学思想を自らにおいて生きようとする、朱子学を生きる、近世知識人は死生の問題を切実な課題として捉えようとする等々、しばしば論じられているが、こうした問題構成こそ、吟味していかなければならないのではなからうか。たとえそうした問いかけが著者自身にとっての切実なる実存的課題であるとしても。また著者が目指そうとする言説と社会的コンテクストを結び営みも、切実な問いを引き受けた近世知識人の苦闘を描くこととは違うのではなからうか。

最後に、本書の重要な課題は著者も序論において述べられているように「一国思想史」を越える試みであることである。近年、国民国家に規定された思想史研究を越える試みとしてトランスナショナルな思想史記述の可能性が議論されている。本書では近世日本における儒礼受容の諸相の解明がなされたわけであるが、「東アジア」においてその類書も含めて広く流布されそれぞれの地域において実践された『家礼』を分析対象とすることは「一国思想史」を越える可能性を開くものといえるし今後の課題でもある。ただこのことは著者にのみ要求されるものではなく我々自身の課題でもあろう。